

日本人のパリ・コミュニケーション

— 明治維新の人びと —

上村 祥二

明治維新が、いかなる「革命」であったのかという論争も、すっかり遠くなってしまった。いまさらながらのその旧びた論議をむしかえそうというのではない。ただつぎのことが時として思い浮ぶのである。その論争の折終始明治維新は、西欧の近代諸革命——とりわけその典型とされたフランス革命と比較して過不足が論議の的となっていた。勿論一八世紀末のフランス社会が課題とした刷新と、一九世紀後半の日本社会が必要とした改革がかなりの程度重なり合うが故に可能となった論議であったことは言うまでもない。とはいえ革命の担った歴史的課題はさておき、時間の近接性を考えた場合、明治維新はパリ・コミュニケーションに最も近い。しかも地理的に大きな距りはあっても、幕府側、維新推進側それぞれかなり

の人びとが、直前、直後を含めるとパリ・コミュニケーションを直接的に目撃している。そしてきわめて少ないが、印象、観察の記録を残している。

ひとは通常、ものごとを自己の理解能力の範囲内でしか観ない。観念の操作が必要な時にはとりわけそうである。とすればパリ・コミュニケーションについての日本人の証言を見れば、明治維新の人びとが、近代の革命、さらには当然近代社会についていかなる観念をすでに抱いていたかをうかがい知ることができる。それはひいては、彼らの「革命」＝明治維新がいかなるものであったのかを知る途に通じるものであろう。

I フランス革命についての知識と理解

明治維新の人びとは、パリ・コミュニケーションを理解するうえで近代ヨーロッパの諸革命についてどのような知識を予め有していたのであろうか。「諸革命」が、明治維新に先立って、どのように日本に紹介されていたかを概観することが必要であらう。

まずフランス革命について。革命についての情報は革命のさなか早く日本に伝わっている。一七九四年（寛政

六)七月(旧曆)長崎入港の『阿蘭陀風説書』が、まず間違ひなく第一報であろう。

「ふらんす国臣下の者共徒党仕り国王并王子を弑し、国内乱妨におよび申候ニ付、阿蘭陀国其外近国よりも同所え押寄、及合戦申候」。

国王処刑から革命戦争(オランダ側からなので干涉戦争)までが伝えられているが、これを読んでフランス革命の理念について何らかの認識をもつことは全く不可能であろう。何より『阿蘭陀風説書』は長崎奉行と老中のみが生にとりえた機密文書で、一般人が、たとえ洋学者であっても垣間見ることさえかなうものではなかった。

日本人自身の手によるものとしては、幕府御書物奉行兼天文方の高橋景保が、江戸参府の長崎オランダ商館長「スツルレル」の話をもとめた『丙戌異聞』(一八二六年(文政九一))が、おそらく最も早いもの一つであり、しかもある程度まとまった叙述を遺している。

「近時歐羅巴諸国ノ大ニ乱レシ本末、其治平後ノ光景、イカニト尋ルニ、我寛政ノ初メ払郎察国ローデウエイキ第十六世ノ代ニ当テ、政令正シカラス、国民苛虐ニ堪ズシテ盜賊蜂起セシニ、有司モ制スルコト能ハズ。千七百九十三年正月国王遂ニ賊ノ為ニ弑サル。時

ニ五人ノ諸侯アリ、一人ノ名ヲパラスト云、四人ノ名ハ記サズ。此五侯力ヲ戮セ、賊ヲ討テ是ヲ平ゲ、各一致シテ国ヲ治メシカドモ、互ニ地ヲ広メントテ又軍起リ、或ハ隣国ト戦ヒ、国内静ナラズ。是ヨリ先撲那把兒的那波勒ナル者アリ。」

革命を起した人びとは「盗賊」、「賊」であり、国王処刑は、家臣による主君殺しを意味する「弑」で表現されている。また一七九〇年からのディレクトワールの五人の総裁は大名にされてしまっている。要するに高橋景保にはブルジョワ革命の意味は理解するところではなかったし、それは広く読まれたという同書の読者にしても全く同じことであつたらう。なお『丙戌異聞』のフランスに関する主要部分は、引用文に続くナポレオンの事績である。

このあとも、フランス革命についての情報がさしてふえない時期が幕末、日本人が実地に欧米を見るまで続いた。しかし情報がふえるとともに、単なる事件の羅列ではなく、革命の理念の理解が問題になる。幕末、維新の日本人はフランス革命の何を理解していたであろうか。そのことを考える前に、フランス革命の、少くとも後代へのメッセージとしての理念を、とりあえず革命の標語「自由」

「平等」「友愛」にならつてつぎのように整理しておこう。
自由。

「自由」は、フランス革命とその後の一九世紀の歴史的文脈において二つの意味合いをもつ。第一には、ある桎梏からの解放であり、この場合その桎梏は言うまでもなく封建制、専政政治である。もう一つはポジティブなもの。フランス革命のなかで達成された経済的自由。そして一九世紀の諸革命の獲得課題であつた表現的自由（集会、出版、結社等）。

この「自由」は早くから、比較的明確に強く言及されてきている。しかしフランス革命のなかに存した普遍性はなく、日本的ヴァイエスがかかつていた。例えば蘭方医で、「蛮社の獄」に連座して自死した小関三英はオランダ人リンデンの著作を翻訳したナポレオン伝（『那波列翁動納把爾的伝』）のなかで、つぎのようなエピソードを伝えている。

「ボナパルテ……暇日、諸友と連合してレイヨンの劇場に寓目す。此時ウィルレム・テルの狂言を行ひければ、『フレイヘイド、フレイヘイド』（敵国に打勝て不羈の国となりたるを祝するの辞也）の声発する時、ボナパルテ覺えず『ヤー、ヤー……フレイヘイド、フ

レイヘイド』と呼ばはりけり。」

この文章におそらく呼応して、吉田松陰は野山獄から友人宛につきのような書簡⁴を書く。

「独立不羈三千年來の大日本、一朝人の羈縛を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや。那波列翁を起してフレイヘードを唱へねば腹悶医し難し。……今幕府も諸侯も最早醉人なれば扶持の術なし。草莽崛起の人を望む外頼みなし。……草莽崛起の力を以て近くは本藩を維持し、遠くは天朝の中興を輔佐し奉れば、匹夫の諒に負くが如くなれど、神州に大功ある人と云ふべし。」

「草莽崛起」という松陰の言葉は注目されるが「幕府も諸侯も醉人」で、「勤王攘夷は萬々出来ぬ」⁵故の、やむを得ずの草莽への期待であつた。目的は「天朝」、「神州」の「独立不羈」の獲得である。したがってナシヨナルな自由のみが求められているのであり、民衆のそれはもちろん、個人のそれを求める視座は未だない。そのことは「自由」がフランス革命のなかではなく、ナポレオンとともに語られていることにもあきらかにあらわれている。

きつての開明派の老中阿部正弘の登場（一八四三年天保一四老中、一八四五年弘化二老中首座）は江戸時代における一つの画期であった。一八五五年（安政二）洋学所の設置（蕃書調所を経て一八六三年（文久三）開成所となる）、一八六二年（文久二）の海外留学生榎本武揚らをオランダへ、西周助（周）、津田真一郎（真道）が同行）、さらに外交交渉のための数次にわたる使節団の派遣などは当然のことながら欧米についての日本人の知識を飛躍的に増大させた。しかもようやく政治、制度、思想といった分野に及んでいったのである。

蕃書調所教授加藤弘之は日本人としては、ドイツ語を学んだきわめて早い例であり、ドイツを中心にヨーロッパの近代立憲制を紹介した。本人は幕末から明治期一貫して保守的立場にあった人であるが、一八六一年（文久元）『鄰草』においてフランス革命について前代と比べると格段に踏み込んだすなわち政治体制にまで及んだ叙述を示している。

「輓近僅に五六十年間に仏蘭西国に数度の傾覆ありしも、皆上下分権の政体を立てながら其政治全く此政体に房るより起る者にして、我寛政五年（一七九三）に路易第十六逆従の為に殺害せられ、天保元年（一八

三〇）六月の傾覆にて甲利第十放逐せられし、嘉永元年（一八四八）三月の傾覆にて路易非立放逐せられし等、皆其政治公明正大ならざるより起る者なり。是故に如何なる善政体を立たりとも、其后之を用いざれば何の益もなきことなり。」

ここでフランス革命、七月革命（六月になつてゐる）、二月革命がそれぞれ、国王が玉座から去らしめられたことによつて把えられ、革命は「傾覆」という用語で語られている。また革命主体はいまだに「逆徒」である。それでも「弑」という語はもはやない。さらに為政者の姿勢に「傾覆」の原因を求めるが、その点にとどまらず、政治制度と運用と正義をも併せ勘案する。「僕は、上下分権の国にて屢擾乱の起るは、君主握権の国にて無事なるよりは反りて優るかと思ふなり」と述べる加藤が「上下分権」のその「下」の実体として如何なるものかを考えていたかは不明であるが、君主専制に対する「下」の抵抗を正当なものと見做そうとするところまで進んでいたことは読みとれる。

ナポレオンに偏することなく、フランス革命の展開過程について、さらに一九世紀の諸革命についてまとめた通史的な事実を幕末、明治維新の日本人に紹介した第

一の書は、日本の近代化のモデルを「先進」の西歐に求めた啓蒙の書としては先駆的な福沢諭吉の『西洋事情』であつたらう。外篇第二冊（一八六七年慶応三刊）と第二篇第三、四冊（一八七〇年明治三刊）がフランスの歴史を扱っている。同書は大成をおさめた。初編の発行部数は、福沢自らが述べるところによれば一五万部を下らず、「偽板」を加えると二五万部はこえた、という。幕末、明治初期の知識人のフランス革命から一九世紀史についての大きな知識の源であつたことは間違いない。

「仏蘭西」の「史記」は、四八六年の「フランクノ首長コロウヒス」による建国から始まり、ナポレオン三世がイタリア統一戦争に介入して、「ロンバルヂノ地」⁶を取得（一八五九年）までを、概観している。その中でフランス革命については、従来のものから隔絶して詳しい。まず「数十年間ノ全国ノ大乱」となつた革命の原因を「本ヲ醸シタルハ年既ニ久シ」と、その「遠因」から述べる。第一にルイ一五世の失政。

「千七百七十四年第十五世ロイス痘瘡ヲ病テ死ス齡六十四在位五十九年其人物ノ不良ナルハ在世ノ事業ヲ見テ知ル可シ死スルニ至リ人民皆コレヲ一国ノ幸トシテ其死ヲ祝セザル者ナシト云フ。」

具体的にはイギリスとの植民争奪戦争の敗北による海外植民地の喪失（一七六三年のパリ条約）と「王以下文武ノ官職」、「寺院ノ僧侶」の腐敗、墮落を挙げている。ついで旧幣に墮してしまつた国民と上からの改革の拙さ。

「第十六世ロイスノ世ニ至リ、文学ヲ以テ旧幣ヲ一新セントシタルドモ如何セン国内中人以上ノ種放僻邪侈ノ習既ニ性ト為リ旧物ノ安ヲ甘ンジテ新法ヲ悦ハズ」
「又新法ヲ行ハントスル者モ誠実ノ大義ヲ失シテ慘酷ニ過キ……」
「事ヲ発スルヲ知テ事ヲ脩ルヲ知ラス。」

「近因」として論吉は、第一にアメリカ独立戦争への軍事介入が大きな財政負担となり、それを切りぬけようとした増税政策が民衆の反撥を招いたことを挙げています。

「宰相ニ子ツクルナル者アリ理財ニ長セリ戦争ノ費冗ヲ償ハンガ為國債ノ法ヲ以テ財ヲ集メ國債次第第二増シ収税ノ法モ亦随テ苛斂ナルヲ以テ下民ノ怨望スルハ固ヨリ論ヲ俟タズ。」

第二に、アメリカ革命から独立、自由をフランス人が学んだことが挙げられる。

「亜米利加ニアル英国所領ノ人民本国ノ苛政ヲ厭フテ

独立ノ兵ヲ揚ゲ自カラ亜米利加ノ合衆國ト稱シ英人ト戦うために派兵された多数のフランス人は、

「数年ノ間亞人ニ接シテ苦樂ヲ共ニシ自カラ不羈自由ノ風ニ浸潤シテ帰國ノ後モ其氣象ヲ脱スルコト能ハス既ニ本國ノ苛政ヲ厭ヒ顧テ一線ノ水ヲ隔テ英吉利ヲ望見レバ……人民皆自由ノ風化ニ浴シ意氣揚々トシテ太平ヲ樂メリ仏人ハ内外ノ景況ヲ比較シ彼ヲ想ヒ此ヲ見テ自カラ亦寛大自由ノ風ヲ慕ハザルヲ得ズ。」
中民、下民といった用語に時代性は感じるが、フランス革命の原因論としては、過不足のないまず適切な紹介と言える。

革命のプロセスについても同じことが言える。名士会（福沢の用語では「貴族ノ会」）の召集、三部会（「衆庶ノ會議」）、国民議會（「ナショナル・アッセンブル」）の成立、バスチーユ襲撃、国王一家のヴァレンヌ逃亡事件、ジャコバンの抬頭、国王処刑と共和政の宣言、テルール、…そしてナポレオンの登場。

革命が目指したものの、革命が達成したものはどのように把握されているであろうか。

自由。福沢が、王政の圧政からの自由を国民が求めるのを肯定的に扱っていたことは先の引用部分からも明らかである。それがジャコバン独裁についてはつぎのよう

かである。それがジャコバン独裁についてはつぎのような評価となる。

「国王殺害ノ後ハ共和政治ト稱シテ「ジャコピン」ノ党類事ヲ用ヒ政府ノ挙動恰モ狂スルカ如クナレドモ其狂ニ触ルル者ハ之ヲ殺シ國中ノ人皆惶恐セサル者ナシ……粗暴モ亦甚タシ名ハ自由ナレドモ其実ハ然ラズ今般ノ革命ヲ以テ仏蘭西ノ政治ハ暴ヲ以テ暴ニ代ヘタルノミナラス改革ヲ望ミシ者モ自由ヲ求テ却テ殘虐ヲ蒙ルト云フ可シ。」

立憲王政派ともいうべきラファイエットを英雄とし、ジャコバン独裁を自由を圧する面でのみ把握、その「ジャコピン」の凶悪」に対して「欧羅巴諸邦ノ人モ」、「傍觀スルコト能ハズ各國同盟シテ兵ヲ挙ケシ」と、その反革命の干渉戦争を専ら人道的な正義の行動とする、またテルミドール反動を「千七百九十四年其党類ヲ捕テ死刑ニ処シ是ヨリ共和政府ノ体裁次第ニ平隱ニ帰シ兵威ハ益々盛ナリ」と述べ、ナポレオンにやはり大きなスペースをさく福沢の秩序感覚からして、その叙述のなかに、主体的に行動する民衆、すなはちサン・ロケットが全く登場して来ないのは蓋し当然であろう。福沢が依拠した文献がギゾーやバックルといった一九世紀中葉のブルジョ

ヨワの学者のものであっただけのせいではない。

平等。

「第八月に至リ二名ノ貴族ノイエデガイロレナル者民心ヲ鎮撫セシガ為從來貴族ノ身分ニ付タル特權ヲ棄テ仏蘭西國中ニ封建世祿ノ痕跡ヲ絶タントノ説ヲ首唱シテ之ニ同意スル者多カリシト雖モ嘗テ其益ナク民庶ノ侮ヲ取ルノミ。」

平等については、一七八九年八月四日の封建的諸特權の廃止の宣言に関するこの叙述のみである。平等という言葉はないし、民衆の權利を見る眼もない。

友愛。

連盟兵の祭典、コミュニケーションやセクシオン、理性の祭典など友愛にかかわるかと思われるものについての叙述は何もない。もっとも友愛は、革命の三標語のなかでもっとも成果の乏しかったものである。

なお、自由、平等、友愛なる標語は『西洋事情』のなかには一切出て来ない。

一九世紀に入って、七月革命、二月革命について簡単

ながらつぎのような叙述がある。

まず七月革命について。

「第十世チャーレス」は「出版ノ自由ヲ禁シ衆庶ノ會議ヲ廢シ人物選舉ノ法ヲ改ル等ノ処置ニ由リ國民ノ不平ヲ唱ル者甚タ多シ」、と復古王政の基本的失政を福沢は適確におさえている。しかしいわゆる「衆光の三日間」を「三日の騒乱」とよんでいる。そしてその「騒乱」は、「護國兵」と「官ヲ去テ護國兵ニ歸」した「官軍ノ兵隊」によって専ら引き起されており、その叙述には例のドラクロワの描くところの蜂起したバリの民衆の姿は全く見られない。ここでも福沢にとって、自由は民衆のものとしては問題とされていないのである。

つぎに二月革命について。

今度はバリの民衆が登場する。政府が禁止した「改革ノ宴」*Banquet de Réforme* に、「府内ノ人故サラニ其集会ニ出席シテ下民ノ決意ヲ示サントスルノ勢アリ。」「群民各処ニ蜂起シテ人氣愈々穩ナラザル」、*「府内復タ一場ノ戦地ト為レリ都下ノ工商貧富老少ノ別ナク各々兵器ヲ携ヘテ王宮ニ迫」*って、国王ルイ・フィリップが亡命したあと「政体復タ一新シテ」成立した共和政（福沢の用語では「合衆政」）のなかに、はじめて社会主義

—その用語はまだ使われていない—が描かれる。

「ロルリンノ党ハ其議論甚タシキニ過キ貴賤上下ノ別ヲ廃スルノミナラス国賊平均ト称シ富人ノ物ヲ取テ貧民ニ分チ国内ニ貧富ノ別モナカラシムルノ説ヲ唱ヘリ。」

急進民主主義者ルドリユロランを社会主義者にしてゐるのは明らかに間違ひであるが、社会主義の、日本への紹介のきわめて早い例であろう。「平等」の原理が、しかも社会的レヴェルでふれられたことになる。しかしその実践である「六月蜂起」への言及は全くない。

フランス革命の場合と同様、ここでも福沢はナポレオン三世に好意的である。理念を高く掲げながらも党派争いで混乱する共和政よりも、「国力益々盛大」の帝政を、レアリスティックな近代主義者福沢はよしとしていたのである。もっとも他の著作すべてと同様、本質的に啓蒙家として、幕末、明治初年の日本の今後の行方をまさにここに読み込んでいたのであるが。

II 日本人の見たパリ・コミューン

一八五〇年代のいわゆる権威帝政は、まさしく権威を

力で共和主義、社会主義、労働者運動など反帝政的性格をもつ可能性のある政治、社会運動を封じ込んでいた。しかし一八六〇年代に入って自由帝政への転換とともに、それらの運動は政府の寛容のもとに再活性化する。就中一八六八年から目覚しく高揚したストライキ運動とパリの公開集会はミリタンのレヴェルでも、追求された課題においてもそのままコミューンに直結するものとなった。

帝政末期のこの高揚するパリを訪れた日本人は、そこに何を見たであろうか。日本人訪問者のなかで、著名なものとしては、まず第一に一八六七年のパリ万博への使節がおもいふか。幕府派遣の徳川昭武一行はもちろんのこと、日本での権力闘争をパリに持込んで争った薩摩、佐賀両藩の派遣メンバーも、いずれも帝政政府にとってはその繁栄と威信を飾り、誇示する格恰の遠来のまさしく珍客であって、ナポレオン三世の謁見（一八六八年一月三日テュイルリー宮で徳川昭武）をはじめ政府筋から大いにもてなされた。いわば、彼らは第二帝政の繁栄の最後の輝きをのみ見たのであり、その陰で高揚しつつある民衆の世界は眼に映らなかつたようである。そのへんのことを同じ時期、幕府の特命使節としてパリに滞在

(一八六七—一八六八)した栗本鋤雲は『晝窓追録』のなかに、つぎのように書き記している。

「巴里に匠作傭工人多し、比輩物価の貴をおそれず、ただ功役の少きを、畏る故に、閑曠にして日を涉れば必ず不良の挙動をなす。二十年の前たえず一揆徒党の起りしは職として此に之れ由れり。当帝『ナポレオン』此に見るあり。故に家屋毀造道路改作、此無際無限の功役を創め、己の財をなくさず国の用を費さず、民の力を以て民の命を養い、帖然として變動するなからしむ。真に治国の巧なる者と云べきなり。」

ナポレオン三世とオスマン知事によるパリの大改造のもつ民衆運動対策としての側面を栗本は誤たず見ぬいており、有能な為政者の確な眼を感じさせる。なお「匠作傭工人」以下の一節は、二月革命にふれたもので、目撃談ではないが、フランスの労働者運動についての日本人の最初の言及の一つであろう。

パリの街のなかに入った日本人もいた。やはりパリ万博に際し、幾組かの芸人一座がパリで興行している。独楽まわしの松井源水一座や足芸の浜錠吉親子など。また幕府の日本館は柳橋の芸者三人に、湯茶の接待をさせて

いる。⁽⁸⁾ 残念ながらこれら日本の民衆は、パリの民衆について何らかのものを書き残すことはなかった。

パリ・コミュニケーションについての情報は、日本へ、早くもことの直後に伝えられている。四月二二日(西暦六月九日)横浜で発行されている新聞からの転載である、として『新聞雑誌』第一号(一八七一年六月)は、つぎの記事を掲げている。

「仏蘭西にてアスセムブリー(政府党)とコムミュン(巴里党即ち賊徒なり)との争い未だ止まず、二月賊徒巴里を攻取らんとして打負たり。又、マイサイルにて戦争し賊徒敗れたり。巴里の医学校エコールドメジン及ラッペル局に於て若干の人数集し、此両党の間に和議を容れんと謀れり。巴里と他所との通路は絶ゆべき勢なり。」

この記事のもとなった横浜の新聞が如何なるものかいまのところあきらかにしない。したがってその情報がいずれの側から出たのかは不明であるが、コムミュンが最初日本に紹介されたのは「賊徒」としてであった。ただこの記事を読んでコムミュンについて何程かの具体的なイメージを抱くことを同時代の日本人に期待することは

全く無理であろう。

なお同紙のなかでパリ以外の地方コミューンのうちマルセイユのそれだけがふれられているのは、マルセイユがフランスの東方航路の拠点であったからだろうか。

この時期のパリを実際に見た日本人のなかで、コミューンについて少しでも発言している者は実に数少ない。

まず幕府側。幕府は一八六八年瓦解し、パリ万博に出席した幕府関係者は急遽呼び返されてコミューンを目撃したものはいない。幕府側の人びとにとっては、コミューンはいわばわが事が終わってからのできごとであった。旧幕臣成島柳北の『航西日乗』は、その「わが事が終わってから」の在欧体験、見聞記であるが、そのなかに、きわめて短い一節であるがコミューンに関し、つぎのような文章を読むことができる。

「リュキセンビルグの天文台に赴き諸器械を観る。

此台に砲丸の痕殆ど蜂巢の如き有り。之を問えば近年乱党の変に罹ると云う……。」(一八七二年)

リュクサンブル宮とその公園は連盟兵とヴェルサイユ軍との激しい交戦場になり、さらに、その形勢が決つたあとヴェルサイユ軍によって、捕虜(非戦闘者も多く

含まれていた)の、裁判なしの大量処刑がおこなわれたところである。旧幕臣で明治新政府に仕えることを潔しとしなかったいわば明治維新の敗者柳北にして、リュクサンブルに立って一年前のパリ・コミューンの戦闘を四年前の戊辰戦争や上野の彰義隊に思い重ねることはなかったようである。コミューンが見せた近代社会の民衆と圧制者の対立構図は、武士として支配階級的一端に連なる柳北には見えないものであったのかも知れない。

明治維新の勝者の側には、パリ・コミューンを文字どおり目のあたりにした人物がいる。開明派の青年公卿西園寺公望である。福沢諭吉の『西洋事情』を読んで「こういう天地に生まれたならば、さぞ面白かろうと感じた」¹⁰として「わたしは全体が不良で、左傾と見られていた」¹¹西園寺がそのあこがれのパリに入ったのはコミューン宣言の直後三月二六日のことである。そこで西園寺は何を見たであろうか。日記と知人宛の書簡、そして自伝の三つに印象、感想を遺している。

「市内の秩序はさほどに混雑せず、わたしどもも平気で学校へ入って勉強し、自由に市内をあるい¹²て、つぎのようなことを日記に書き留めている。

「四月二日初度ノ戦ナリ、コンミュンノ長ギユスタブ、フルーランズ戦死ス。今日ヲ手始メトシテ毎日戦争アリ。雙方傷死者多少アリ。コンミュン党巴城ニ在ルチエール及ジュール、ファブルノ家ヲ毀テ、財物ヲ掠ム。……ブラス、ヴァンドームノ銅柱ヲ倒ス。日々戦争不止、殆ンド六週日ヲ過グ。

四月三日政府ノ兵コンミュン党ヲ破リ、巴城ニ入ル。初メ西曆千八百七十一年三月二十日政府ヲヴェルサイユニ移セシヨリ、今日ニ到リ、両党ノ戦争アリ大略如左。

初メ和ナリテ、李人巴黎ニ入ルトキニ當城中ノ大砲ヲ集メテ盡ク之ヲモンマルトルト名クル小岡上ニ置ケリ。蓋シ李人ノ眼ニ触レ、其嫌疑ヲ来スヲ恐テナリ此大砲多クハ籠城中、各区ヨリ人民自ラ金ヲ出シテ製スル所ナルモ、政府ハ其ノ之ヨリ紛擾ヲ来スヲ焦リ、一時、謀ヲ以テ奪ハント欲シ、三月十八日（西曆以下然リ）払暁、兵ヲ彼ノ小岡ニ遣リ、盡ク彼ノ大砲ヲ取ントス。巴内ノ民、忽ニ之ヲ曉リ、突然奮起シ、政府ノ兵ト争フ。其勢ヒ甚ダ猛獯、政府ノ兵終ニ奪フコト能ハズ。此時ルコント及クレマントマノ兩將、巴民ノ為ニ捕ヘラレ、砲ヲ以テ殺サル。

籠城中、防禦ノ為メ募ル所ノ兵卒、多ク遊民無産ノ徒ニシテ、其兵タルニ丑レ、恒業ニ復シ、兵籍ヲ解クヲ欲セズ。各隊中ニ散在シテ良兵ヲ煽動シ、マサニ乱ヲ成サントス。城中ノ民亦、其政府ノ李人ヲ待スル厚ニ過ルヲ怒リ、李帝ノ巴黎ニ入ルヤ、已ニ暴動ヲ働ラカントスル者多シ。此ニ於テ巷議紛然、復タ鎮圧ス可カラザルニ到レリ。

政府ハ暴徒ノ勢急ニ如何トモス可カラザルヲ知り、又兵ヲ用ヒテ屍ヲ市中ニ積ムヲ欲セズ、断然ヴェルサイユ之地ニ引揚ゲタリ……。此時ニ当リ政府ノ良兵ハ長キノ籠城ニ疲勞シ、偶々李国ト和識ナルニ及ンデ、或ハ休暇ヲ乞ヒ、或ハ故郷ニ歸リ、巴黎ニ在ル者甚ダ少シ。而彼ノ兇暴ノ徒ハ時ヲ得テ其志ヲ逞フセントス。」明治維新という革命の推進者で、コミューン下のパリに自由に暮し得た、「左傾」していた青年西園寺にして、コミューン¹⁹は、「遊民無産の徒」、「暴徒」、「兇暴の徒」であり、帝政の正規軍——ドイツ軍に投降したのちヴェルサイユ軍になる——は「良兵」であった。こうした言葉はパリよりの知人宛の書簡においても勿論同様である。

「私は昨年普に打負けしより国内更に紛乱し遂に解兵ノ時より事起り共和政事を名と姦猾無恥之徒大ニ愚

民を煽動し以千才ヲ用いたれり。政府ハ是を鎮定する事不能都而此賊を避けヘルサイユと云地に引移れり。賊ハ則巴里斯に擲政府を偽立し頗暴威を張る。是より政府兩立之形をなし日々砲声止ム時なし。万民之疾苦害に不可言。然とも賊ハ是れ多ハ各国浮浪之屯集、其暴行日々相益し人望尽ク去れり。」

「人心之帰向する也政府兵巴里斯に入也否是迄賊兵之為メ圧服され府下之住民我も我もと携砲賊ニ向フ、其光景も亦盛なり。既ニ政府之方大ニ打勝賊共敗走す。政府之兵則四方ニ散テ放火を救賊を捕ふ、捕れハ則尽ク是を誅ス、其屍路頭に充り。欧州にハ珍敷愉快之所置なり。」

ヴェルサイユ軍のバリ制庄とともにそれまで息をひそめていたバリのブルジョワ市民が男女ともども街頭に出、捕虜となったコミューナーに罵声をなげかけ、処刑された屍体に侮辱を加えたことは事実である。ただここでもブルジョワ市民の側から事態を見て、「愉快之所置」と快哉している西園寺の立っている位相は、彼がその一端を担う新生明治国家の行末をうかがわせにすでに十分でないか。そのことは、つづく行文で一層明らかであろう。

「噫此後之結局如何あらん一目を刮て傍觀致し候。

抑近日欧州之風儀開花ニ過キ繁華流れ、殊ニ巴里斯ハ欧州ノ中央にして奢侈を極め其人情之浮薄なる尤厭ベシ。……此時ニ在テ第一世拿慕列翁之如キ大英雄之出在救正するに非ンハ豈能是ヲ救正センヤ。」

激動の日本からやって来て、激動のバリを見たとはいへ、強力な統治による秩序の確立を望望する西園寺は結局治者の一員であって自律的な民衆の運動を見る眼はもたなかつたのであろう。

まさしく明治維新の勝者であり、その後の明治国家建設の方向を決定していった人びともコミューン後間もないバリを見ている。⁽¹⁴⁾岩倉具視以下の欧米視察団がパリ市内を観光、視察したのは一八七二年一月一六日から翌年二月一六日までである。彼らは「シャンゼルゼーノ広衢」、「コンゴルト苑」、「ブードワル大街」と、つぎつぎにナポレオン一世、オスマン知事によって整備された近代都市バリの偉容に目を瞠る。その分叛乱したコミューナーは賊徒と目に映る。

「レット、レボブリカンノ党ハ暴発ノ共和党、所謂「コムミュン」√、正ニ煽動シ、騒擾安カラス」

「前年仏國ノ乱ハ、普軍ノ禍ヨリ「コンミュン」ノ禍ヒ尤モ猛ナリ、文明ノ國モ、中等以下ノ人民ニ至リ

テハ、猶冥頑ニシテ驚悍ナルヲ免カレス、西洋各国、上下ニ通シ風俗美ナリト謂ハ、亦大ナル誤リナリ。」

コミュニューに対すると、当然対照的に、コミュニューの圧殺者ティエールにはきわめて高い評価が与えられている。「巴黎暴徒ノ鎮定ヲ以テシ、国家艱難ノ際に尽力シ」た、「高名ノ政治学者」、「老練熟達ノ政治家」、「短少ナル老翁」である「大統領ルイ、アトルフ、チエル」。「諸道ノ兵集リ、一時ニ掩壓シテ、賊徒ヲ勦絶シタルハ、チエル君ノ本謀ナリ」。こうした褒言もコミュニューを圧殺して成った体制の賓客であり、「大統領ノ宅ハレーデエリゼ」で招宴にあずかった一行の単なる阿諛では決してなく、その政治への共感があつたのであろう。

岩倉使節一行が、人的にも思想的にもその後の明治国家建設の一翼を担っていくのであるが、その明治国家に痛烈な批判をもって立ち向つたのが自由民権運動である。そしてその運動にフランスの民主主義思想で武装せしめたのが中江兆民であつた。兆民は一八七二年のはじめから一八七四年のはじめまで、間に短いリヨン滞在、ロンドン旅行をはさんで二年間、パリ・コミュニュー後間もないパリに学んだ。後年「東洋のルソー」とよばれた兆民の民主主義思想にパリ・コミュニューは、パリは如何なる

意味を有したであらうか。

「先生の仏国に在るや、深く民主共和の主義を崇奉し、階級を忌むこと蛇蝎の如く、貴族を悪むこと仇讐の如く、誓つて之を芟除して以つて斯民の權利を保全せんと期するや論なし。且つ謂ら、凡そ民権は他人の爲めに賜与せらるべき者に非ず、自ら進んで之を恢復すべきのみ。……古今東西、一たび鮮血を濺がずして、能く真個の民権を確保し得たる者ある乎。吾人は宜く自己の力を揮つて専制政府を顛覆し、正義自由なる制度を建設すべきのみと。」¹⁶⁾

弟子幸徳秋水による師の追悼文ともいえるこの文章を、少くとも兆民の思想的確立をパリ留学中にもとめる点において、字句どうりには受容れることはできない。

何時のことか不明であるが、政治体制について、「なかに、つぎせば更にいいものができるという説」をつねづね主張していた兆民¹⁶⁾が本来的に改良家ではなく、革命家の氣質を存していたことは確かであらう。ただし彼の生涯を思うとそれは思想家としてのそれであつたと思われるが。

「仏蘭西国是れ蓋し自由平等の瘋癲病院と謂ふ可し。彼れ其れ自ら狂顛して他国の狂顛を治する者と謂ふ可

し。自ら謬迷して他国の謬迷を癒やす者と謂ふべし。一国民を挙げて他国をして望見て自ら懲蒞せしむ。是れ仏国の短処なり長処なり。厄難なり幸福なり」⁽¹⁷⁾

この革命の国フランスへの兆民の熱い思いは真実のものであったろうが、具体的に革命の都パリと結びついたものであったかどうか。あきらかなことは、七月革命、二月革命は挙げていても、時間の上でもっとも近しかったパリ・コミューンについて兆民は終生ふれることがなかったということである。「自由と呼び麵包と呼び憲法再開と呼び宰相放血流れ肉飛」⁽¹⁸⁾んだのは、兆民にとってなおパリ、リヨン街頭に群れた「賤民」であった。さらにコミューンの「庄殺者」ティエールを、ガンベッタなどとともてフランスの英雄と、折にふれて挙げた⁽¹⁹⁾という中江兆民にはやはりパリの革命的民衆は見えなかったというべきであろう。帰国後兆民がまっ先に取り組んだのはルソーの『社会契約論』という原理の書であった。

幕末、明治維新の日本人は誰ひとり、いかに直接コミューンのパリを見ようとも、自律的な民衆の革命を見ることができなかった。民衆の革命という視点を獲得する

には、この時期の日本人には、予備的な歴史的知識ともいべき、フランス革命から一九世紀の諸革命についての知識があまりに乏しく、その認識は偏頗であった。また彼ら自身が担っていると意識した日本の変革の歴史的使命においても、その使命感は民衆を遠く隔ったところで生れ、燃えていた。結局明治維新の日本人は、幕府側のひとも維新側のひとも、民衆の変革運動を見る契機を有さなかったが故に、パリ・コミューンの革命が見えなかった、という他ない。

(註)

- (1) 『阿蘭陀風説書』岩波書店。
- (2) Johan Willem de Surfer (1823-26) は一八三三年商館長として長崎へ。二六年ジーボルトを伴って江戸参府。
- (3) 小関三英は一八三七年(天文八)自死。同書は一八五七年(安政四)、渡辺華山の門人の田原藩士によって公刊。
- (4) 一八五九年(安政六年四月七日)、萩に滞在の北山安世宛。安世は佐久間象山の甥。
- (5) 安政六年四月七日、岩倉獄中の野村和作宛。

- (6) 一八六〇年三月、ニースとサヴォワの併合。
- (7) 例えば徳川昭武の随員であった波沢栄一『航西日記』など。
- (8) 宮岡謙二『異国遍路・旅芸人始末書』を参照。
- (9) J・ルージュリ著、上村、田中、吉田訳『パリ・リーブル』ユニテ出版、一九八七年、第六章参照。
- (10)、(11)、(12) 木村毅編『西園寺公望自伝』講談社、昭和二四年。
- (13) コミューンの人びとを、従来使われてきたコミュニナールという呼称ではなく、彼らの自称であったコミュニヌーという言葉でよびたい。拙稿「共和国第七九年のサンロッキロット *ou/nou*」、『追手門学院大学二十周年記念論集—文学部篇』一九八七年三月、注(1)参照。
- (14) 久米邦武編『特命全権大使・米欧回覧実記』(三)、岩波文庫、一九七九年。
- (15) 幸徳秋水「兆民先生」明治三十六年(『幸徳秋水全集』第八卷)。
- (16) 木村毅編、前掲書。
- (17)、(18) 中江兆民「選挙人目ざまし」明治三年(『中江兆民全集』第一〇卷)。
- (19) 幸徳前掲書。